

岡 正 雄 著

『異人その他—日本民族=文化の源流と日本国家の形成—』

言叢社, 1979年, 489ページ.

本書は、岡正雄が日本民族=文化について昭和3年から53年までに発表した論文と大林太良らによる岡民族学の解説とを収録した論文集である。

周知のように、岡は、わが国において未成立の学問であった民族学を基本から学ぶべく昭和4年ウィーン大学哲学科に入学したのである。そして、昭和8年『古日本の文化層』(Kulturschichten in Alt-Japan)によって哲学博士の学位を授与された。

その後、岡は、昭和28年に都立大学に社会人類学の大学院が開設されたのを契機にして、当時岡研究室に所属していた鈴木二郎助教授(現東京造形大学学長)と三人の助手住谷一彦(現立教大学教授)、蒲生正男(現明治大学教授)、祖父江孝男(現国立民族学博物館教授)および学部学生であった高橋統一(現東洋大学教授)、山田隆治(現南山大学教授)らとともに伊豆・伊浜村(静岡県)の調査に着手した。この調査は、岡の学位論文を戦後の日本社会において検証すべく実施された最初の作業である。この調査を手始めとして、岡民族学は、文献研究(仮説)の段階から実証研究(理論化)の段階へと進展すると同時に、戦後日本の社会人類学的研究に大きな影響を与えることになったのである。

そこで、ここでは、岡民族学の全体系(神話、言語、社会組織等々)のうち社会人類学的家族論に与えた影響の問題を中心に紹介することにしたい。というのは、このことが岡民族学の学問的価値および本論文集の現代的意義を明らかにすることになると考えたからである。

岡は、(1)母系的・秘密結社的・芋栽培——狩猟民文化、(2)母系的・陸稲栽培——狩猟民文化、(3)父系的・「ハラ」氏族的・畑作——狩猟・飼畜民文化、(4)男性的・年齢階梯制的・水稲栽培——漁撈民文化、(5)父権的、「ウジ」氏族的・支配者文化という異質の文化をもった種族が日本列島に相前後して移動・定着し、わが国の民族文化を形成したとみているのである。

前述のように、この仮説を検証する作業が昭和20~30年代にかけて、わが国の農漁村を舞台にして進められたのである。その結果、わが国の民族文化は、一元的に構成されているのではなく多元的な構造(「同族社制会」と「年齢階梯制社会」)をもっていることを再確認したのである。この多元的な構造に照応する親族組織および家族組織に関する研究は、蒲生らによって継承・発展せられ、昭和40年代に至ると、I.「同族制社会」(オヤコの原理・身分原理の社会)——「マキ型親族集団」(祖先中心的な親族の組織化)——「拡大型」もしくは「直系型」家族と、II.「年齢階梯制社会」(年功の原理・年齢=世代原理の社会)——「イトウ型親族集団」(自己中心的な親族の組織化)——「核心型」家族の二類型を定立したのである。

しかし、この多元的・類型論は、折しも高度経済成長下における社会変動(人口移動、「核家族」化等々)旋風のなかで、ほとんど問題にされなかった。ところが、近年、蓮見音彦は、住谷、蒲生理論の紹介とこれらの理論に対して一定の意義を認めてきている(『家連合』と村落, 昭和49年)し、森岡清美も昭和50年代には、多元的な家族構造論を提示している(『社会学からの接近』, 昭和51年)。

かかる近年の研究動向をみるにつけ、社会に内在する基本的な性格を十分に認識していない社会変動論(一直線的な発展段階論)が、十全なものとなりえないことを、岡民族学は私達に示唆しているのである。

かかる意味で、本書は、わが国の社会構造とその変動、家族構造とその変動あるいは地域人口の構造と変動に関心をもつ研究者にとって避けて通ることのできない論文集であるといえよう。(清水 浩昭)